犬吠埼風は中二である

名も無き詩人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語の主人公はわたし犬吠埼風である。

わたしが結城友奈、東郷美森、三好夏凛と出会う少し前の話し。

青春というのにはまだ早い無垢な水色時代。

あの人と出会い如何にしてわたしが中二病を発症したか。

どのようにして勇者部が誕生したかの物語である。

以降、大赦検閲済み情報

本編登場人物

犬吠埼風：中学1年。中二病を発症中。勇者部最初の部員。

乃木春信：完璧超人。真性中二患者。勇者部顧問。妹あり。旧姓は三好。

犬吠埼樹：風の妹。可愛い。勇者部の仮部員。

乃木園子：ミイラ少女。風の友達。四国最強の勇者。

ＤＡＩＧＯ：春信の幼馴染み。ロック好き。ヴァンガードファイター。

シラトリ：謎の少女。そば好き。長野の守護を担う勇者。

間幕登場人物

センセイ：間幕の語り部。勇者になれなかった者。

目　次

第一話　女子力覚醒と勇者部の始まり（７月１３日完）――――１
間幕１　せいれい（７月３０日完、７月３１日修正）――――１０
第二話　　日本酒とファーストキスと幽霊少女　（１／３）――――１３
第二話　日本酒とファーストキスと幽霊少女　（２／３）――――１６
第二話　日本酒とファーストキスと幽霊少女　（３／３）――――２０
間幕２　神樹――――２４
第三話　ＳＯＳ！即売会に参加せよ（前編）――――２８
第三話　ＳＯＳ！即売会に参加せよ（後編）――――３４
間幕３　勇者――――４０

第一話　女子力覚醒と勇者部の始まり（７月１３日完）

1

わたくしこと、犬吠埼風は今年で中学二年になる。中学時代の三分の一を消費し、青い春という一度しか来ない風を待ち、一人日々女子力を磨いていた。

大赦から命を受けているある役目を果たすため、私は彼女達の元に向かっていた。

さて、すんなりと彼女達が我が部へ入部してくれるか。ワクワクドキドキものである。

彼女達の姿が見えてきた。一人は車椅子を押している子。スポーツ少女と言ってもいいくらい、元気な笑顔で車椅子の女の子に話しかけている。車椅子の子はその話に相づちをうっている。

車椅子の子は黒髪で大和撫子と言ってもいいかもしれない顔立ち。どこか儚げで、でもはっきりとした強さが感じられる。その証拠に彼女は足が不自由なのにそんなことを思わせない雰囲気だ。

彼女達の仲の良さが見て取れる。

「東郷さんは、部活何にするか決めた？」

「まだ、決めてないよ。友奈ちゃんは決めたの？」

「迷ってるよ。うどん部、お菓子作り部、ファーストフード研究部なんてのも捨てがたいよね。」

「友奈ちゃん、全部食べ物に関係した部活だよ。それに口の端からヨダレが垂れてるよ」

黒髪の少女が笑っている。

そう言えば、こんな会話を前にしたことがあった。

あれは、私が中二に上がる少し前だった。そもそも、結城友奈と東郷美森を勇者部という部活に入れさせようと、奇天烈な案を出したのもあの人だった。

2

大赦からの命令で、今年入学する結城友奈と東郷美森に接触せよというメールが来ていた。
どのようにして、二人と接触するか。学年が違うため、友達になる機会も少ない。同学年なら、警戒心も少なかっただろう。だが、二人にとっては私は学年が一つ上の先輩になる。
私は考え事をしながら屋上の階段を上がる。神樹様の社が立ててある屋上は、滅多に人が来ることがなく、考え事をする上では一番の場所である。
屋上の扉を開けると、澄んだ空気が流れ込んでくる。この街を一望できる学校の屋上は、私のお気に入りの場所であった。景色の向こうには海が見えて、その先には神樹様が作った壁が見える。四国はこの壁に囲まれている。神樹様があたし達を守るための壁だと習った。
私は風に吹かれながら、長い髪を抑える。さて、どうやってあの二人と接触するか。やっぱり、手っ取り早いのは何かの部活に勧誘することよね。では、何の部活に誘うかだ。
一番はうどん部ね。だけど、それは私が一年のときにすでにあった。できれば、一般の人との接触がない部、メンバーは私と結城友奈と東郷美森の3人だけがいい。
少人数でもできる部活。何があるだろうか。
「全然思いつかない、私の女子力を持ってしても、彼女達を向い入れる部が思いつかない」
『ふむ、なるほど女子力二万四千のきみでは、太刀打ちできないというのか。それじゃー、フリー○ーにも勝てないな』
「そうそう、一回死ぬ寸前まで痛めつけてもらって、そこから回復しないと・・・って、あなた誰よ」
いつの間にか屋上に、眼鏡をかけた男性が立っていた。学校内では見かけない。それに、格好が制服ではないし、年は私よりずっと上のように見える。
『ふむ、レディーを警戒させてしまったか。これは失敗したな。では、今日はこの辺で退散しよう』
私が何かを聞く前に彼は屋上を出て行った。いったいなんなのだ。

「私の女子力はナメック星編のベジー〇並みか」
私の心のツッコミが言葉に出ていた。
この後、彼とは思いがけない場所で再会する。そして、私の女子力が二百万まで跳ね上がる出来事が、起こるのだった。
3
朝礼で私は予期せぬ予感があった。それは転校生がやってくるドキドキやわくわくではなく、どちらかというと仲違いした友達と突然道端で出会って、目を合わせてしまったような。何を言っていいのか、第一声の言葉を探す気分。
そんな、私の気持ちは知ってか。彼はにっこりと笑い、自己紹介を始めた。その笑い方が、無性に腹がたった。私はその後のことはよく覚えていない。あの屋上で会った彼は私のクラスの教育実習生として、今私の目の前に現れたのだ。これは何かの陰謀なのだろうか。その日の授業は私の耳には全く入ってこなかった。
放課後になり、私はどのようにして、結城友奈と東郷三森を引き入れるかを考えるため、一人屋上で空を見上げていた。
そこへ聞きなれない声がした。
「犬吠埼さん」
そう私を呼ぶ。ニコニコ顔の教育実習生がやってきた。
私は少し怒り気味で返事をした。
「なんでしょうか」
「なんか。声が怖いよ。風ちゃん」
突然、名前のちゃん付け呼ばれた。
私は胡散臭い人を見る目で彼を睨んだ。まったくもって、この人はどういう訳で、私に近づいたのだろうか。
「警戒心が強いと、モテないよ。もっと心をオープンにしなよ。そうじゃないと二年生に上がったとき、大変だよ」
「ちょっと、それってどういう意味よ」
「結城友奈と東郷三森と仲良くなるためには、もう少しオープンにならないとだめだよ、って意味だけど」
彼は隠すことなく、あっけらかと言う。

何がなんだかよくわらない。来年、讃州中学に二人が入学することは、大赦から命令された私しか知らないことだからだ。
「君は感もあんまり鋭くないようだね。僕は君と同じく大赦から派遣されてきた人間だよ」
困惑している私を見て、さらに話を続ける。
「大赦は君だけでは、今後の対応に向いていないということで、僕に君のサポートを命じられたんだ。まあ、僕みたいな完璧超人が加われば、問題ないだろう。特に東郷三森に関しては、中学生の君では難しい問題もあるしね」
「もう分かった。あなたが大赦の人間で、嫌な奴で、中学生に馴れ馴れしくちゃん付けをする変態で、自称完璧超人の教育実習生ということがね」
「それは、酷い言われようだね」
「すべて、当てはまっているでしょう。どこに反論の余地があるのよ」
「手厳しな。妹が言いそうだ」
「へえー、あなたにも妹がいるのね。性格悪い兄がいる妹さんもさぞかし大変よね」
「まあ、あんまり妹とは話さないからな。風ちゃんの妹のように物静かでもないし、僕みたいに世渡りが上手ではないしね。不器用な妹なんだよ。まあ、あいつについては、今はいいさ」
「ずいぶん、冷たいお兄さんね。あなたの妹さんには同情するわ」
「厳しいね。さて、数ヶ月の間だけど、よろしく」
満面な笑みで彼は手を出す。どうも、握手を求められているようだ。
「何、その手は？」
「握手だよ。努力・友情・勝利。昨日の敵は今日の友。最後は握手して、笑い合おう。わはっはー」
彼は漫画で出てくるセリフと漫画にも出てこない悪趣味な笑い声を出す。
仕方なく私は握手をする。私の握手に満足したのか。彼はこう言った。

「では、早速問題点を洗い出そう。その前に秘密の会話をするためには、何が必要かな。そこの犬吠埼さん」
「はい、人が少なく決まった場所で会話ができる場所、できれば座れて、ある程度スペースがあるところがいいです」
「いい答えだ。ならば、ちょうど良い場所がある。今は使われていない。家庭科準備室があるよ」
そう言うと彼は悪戯っ子の笑みで校舎奥へと歩き始めた。
家庭科準備室は、私たちの教室とは別の棟にあり、家庭科の実習授業でもない限りは、あまり訪れることがない。この棟は他に音楽室やパソコン室などがあり、屋上には神樹様を奉った社があった。
「なんで、あなたが準備室の鍵を持ってるの」
素朴な疑問が口に出ていた。
「ふむ、なんでだろうね。校長先生のあれな現場を見てしまってね。口止め料ってヤツさ。うしししー」
「呆れた人ね。人の弱味を握るなんて」
「まあ、そういうな。こうして秘密基地も手に入れたことだし、放課後ゆっくり今後の対策もとれるだろ」
その後、彼と今後の対策を考えていたが、ふと時計を見るとそろそろ妹の樹を迎えに行く時間だった。
「私、そろそろ妹を迎えにいかないと」
「あれ、もうそんな時間か。夜になるのも早いし今日はここまでだね。妹って、あれだね。ちんまくてクリクリした子で、風ちゃんのあとをちょこちょこついていく感じの子だよね」
「あなたは、なんでそんなに私の妹のことに詳しいのよ。まるで、私たちのこと何でも知ってるみたい」
「何でもは知らないよ。知ってることだけ。風ちゃんがうどん好きでわんこうどん大会に出ようか迷っているのも、僕は知っているよ」
私は、携帯端末を取り出し、迷わず一一〇にかける。
「あ、警察ですか。今、私の隣に変質者がいるのですが。え、場所ですか、」
「はい、ストーップ」

私の端末を取り上げる彼の顔はすごく面白い顔になっていた。
「その顔頂きです」
私の心のアルバムに一枚の写真が飾られた瞬間だった。
4
樹の小学校は、讃州中学の直ぐ近くにある。歩いて１０分ぐらいのところだ。父も母も亡くなって私たち姉妹だけで生きていくには、私がしっかりしなくてはいけない。さいわい、大赦からの援助でお金には困っていない。ただ、樹には支が必要である。私がお母さんにならないといけないのだ。今日は鍋焼きうどんにしよう。樹を迎えにいって、スーパーで買い物しなくては、タイムセール間に合うかな。
「それにしても、何であなたまで付いてきているの」
私の後ろをニコニコしながら付いてくる影が一つ。
「いや、風ちゃんの妹を拝みたくてね。ダメかな」
「ダメに決まってるでしょ」
「えー、ここまで付いてきたのにそれはないよ」
「そんな顔しても、結局付いてくるんでしょう。くれぐれも妹にはちょっかいかけないでよね」
「りょーかい。自称紳士の名において、約束する」
「返事だけはいいわよね」
小学校の校門が見えてきた。向こうから樹が手を振ってくる。いつ見てもラブリーな妹だ。
「おねーちゃん」
樹が私に気づいたのか近づいてくる。
そして、私の顔を見て、隣の人物に視点を合わせ、一人柏手をうつ。何を思ったのか妹はこういった。
「不束な姉ですが、どうかよろしくお願いします」
「ちょっと、樹。何かを勘違いしてない」
「え、お姉ちゃんの彼氏さんじゃないんですか」
「違う違う、この人はうちの学校の教育実習性。えっと名前は・・・、あれなんだっけ？」
「風ちゃん、それはひどいな。いくら僕でもそれは傷つくよ」

「いや、機巧は絶対傷つかないでしょ」
「さて、いあやー。風ちゃんの妹さんは可愛いね」
「あんた、傷ついたっての嘘でしょう」
　彼は悪びれもなく話し始める。
「はいはい、では自己紹介をしようか」
「勝手に自己紹介をしないでよ」
「風ちゃん、ちょっとうるさいよ。妹さんにきちっとご挨拶をしないと、こういうのは形式が大事なんだよ」
「あー。私、頭が痛くなってきた」
「お姉ちゃん、大丈夫？」
　心配そうに私を見上げる樹に安堵を浮かべつつも、これ以上樹に心配させるのもなんなので彼を止めるのは諦めた。
「風ちゃんも諦めた事だし。改めて自己紹介するね。僕は、讃州中学の教育実習生で、風ちゃんの部活の顧問を担当する乃木春信」
「え、いつあんたが顧問になったのよ」
「いや、こないだ教頭先生のあれな現場を見つけてね」
「それ、部室を手に入れる時にも言ってたわよ」
「まあ、そんなことはどうでもいいか。こほん、樹ちゃんも我が部に入らないか」
「何言ってるの、樹はまだ小学生よ。それに樹には・・・」
　私は言葉を飲み込んだ。樹に関係ない訳ではない。あと1年後には嫌でも、関わらなければいけない。それが少し早まるだけ。
「風ちゃん、難しく考える必要はないさ。視点は複数あった方がいいんだよ。妹と一緒に部活をするのも悪くないよ。まあ、僕と二人の部活も、それはそれで悪くないけどね」
「いや、それは却下で。樹、悪いんだけど。部活作りに協力して、お姉ちゃんの一生のお願い。じゃないと、私の貞操が危ない」
「なんだか。よく分からないけど。分かったよ。お姉ちゃん。ところで、部活ってどんな部活なの？」
「名前は、まだない」
「いや、決めたぞ」

いつ部活の名前が決まったのだろうか。また、この人の突拍子もない言葉が飛び出るのだろうか。ちょっとワクワクしている私がいる。
「勇ましい姿の姉、それに寄り添う健気な妹だ。あれだね、こりゃー。勇ましい者。勇者部っでどうだろうか」
私は目を丸くした。
「勇者部か、それいいかもしれない。でも、何をする部活なの」
「そりゃ、勇者といえばクエストをこなす者さ。みんなの困っていることを助ける。まあ、ボランティアみたいなことかな」
彼は拳を高らかに空に宣言する。まるで、仲間が集まり、これから冒険が始まることへの勇者の咆哮みたいに。
「お姉ちゃん、乃木さんって面白い人だね」
「本当だよ。勇者部誕生の前祝いだ。今日は鍋焼きパーティをするわよ。乃木先生も参加しますよね」
「鍋焼きかな。いいね。もちろん参加するよう」
彼は二つ返事で頷く。
「そうと決まったら、スーパー行くよ。特売という戦場が私たちを待っているわ」
このあと、特売コーナーに勝鬨が上がるのだが、それはまた別の話。
家への帰り道、樹が私に耳打ちする。
「お姉ちゃん。私、乃木って名前に心当たりがあるんだけど、何かひっかからない」
「覚えがないわね～。樹の考えすぎじゃない。まあ、珍しい苗字ではあるわね」
「そうかな。小学校の授業で聞いた気がする。でも、そのうち思い出すよね」
「そうそう、今は鍋焼きパーティだよ」
この時、もう少し注意深く樹の言葉の意味を理解していれば。彼が何者で、乃木という苗字の者がなぜ、私達に接触してきたのか。それを知るのはもう少しあとのことになる。この時の私は、新しい部活のことで頭がいっぱいで、これから起こることを全く予想せず、ただただこれから始まる冒険の世界に夢を見ていた。

『第一話　完』

次回予告

勇者システムとは別のシステムせいれいとは何か

「私たちは共犯者だよ」

「それでも僕はこの賭けに勝つ」

「あなたって本当バカよね」

「ああ、最高だ」

次回『間幕1　せいれい』

間幕1　せいれい（7月30日完、7月31日修正）

目の前には3台の白い携帯端末がある。勇者になるべきものが持つと、世界の敵であるバーテックスと戦う力をえる。そう、世界を守る勇者が誕生するのだ。この場にない端末で、1台は三好夏凜に渡されている。元は三ノ輪銀が使用していた端末を元に強化された端末だ。武器の仕様は2振りの刀。赤をイメージした作り。三好夏凜にあった色だろう。もう1台はすでに犬吠埼風に渡されている。端末の調整は彼が直接行うという。まったく、彼は犬吠埼姉妹には甘いのだ。私情挟むと足元もすくわれるとはいったものだが、彼に限ってはそんなことはないだろう。それほど、彼は完璧なのだ。完璧な人間をヒトは勇者と呼ぶだろうか。いや、彼は勇者と呼ばれるのにはあまりにも完璧すぎる。そうだ、魔王と呼ばれるのにふさわしいかもしれない。魔王のように完璧で、しかし滑稽なキャラ。彼が考えていることは私にはよくわからない。何故、今更彼女たちに関わろうとするのかも理解できない。だが、理解できないからこそ、彼は勇者ではなく、魔王であることの代償なのだろう。3台の端末ももうじ彼女たちの手に渡る。そして、彼の筋書き通りに物語は進むのだろう。完璧なストーリー展開、勇者が魔王をうつのは、物語として至極当然の展開なのである。

私は傍観者の一人として、彼の。いや、勇者を夢見て、勇者になれなかった者たちの物語を綴るだけである。

はじめまして。私はセンセイと呼ばれるモノ。この世界について研究し、世界の理を探求する者。

私は彼に『私たちは共犯者だよ』と言っていたことを思い出す。物騒な物言いだが、その言葉が私と彼の関係であることは間違いないのだ。魔王の隣には優秀な側近がいるのはお約束であるように、一緒に悪いことをするのは、利害関係が一致した共犯者だけなのである。

いくら彼が完璧人間であっても、運や天というのがあって、必ずうまくいかないことや予期せぬ出来事というのが発生する。そんなときどうするのかと彼に聞いたことがある。彼の答えはこうだ。『運や

天というのは物事に勝てない者の言い訳。例えどんなに希望がなくても、限りなく0に近くても、それでも僕はこの賭けに勝つ。僕は完璧な人間だからね』あそこまで、きっぱりと自分は完璧な人間であるという人を私は知らない。だから私はこう返した。『あなたって本当にバカよね』私の呆れに彼は大真面目に言った。『ああ、最高だ。最高の褒め言葉だね。惚れちゃいそうだ』彼は益々バカな物言いで、1人うんうんと頷いている。バカと天才は紙一重というが、彼は天才でもありバカでもあるのだ。

今回の勇者システムにはもう一つ別のシステムが組み込まれている。それがせいれいシステムだ。三ノ輪銀の壮絶な犠牲によって生まれたシステム。いや、彼に言わせれば三ノ輪銀は、犠牲ではなく、未来への礎となったという。私もそう思う。三ノ輪銀は確かにせいれいシステムの一部として取り込まれたのである。せいれいシステムの礎と言ってもいい。あの大橋での戦いで、何故三ノ輪銀は1人で3体のバーテックスを撃退できたのか。これが、ゲームや漫画の世界だと奇跡や己の限界を超えた力で撃退したという、どうにも釈然としない理由かもしれない。だが、私は、いや彼も同じ考えだろうが、三ノ輪銀は満開し散華したと考えれば、文字通り絶対的な力で撃退できただろう。ただし、供物が己の命という一つしかないものを差し出してしまったのだ。でなければ、三ノ輪銀はここで死ぬはずがない。乃木園子が勇者システムにより、満開と散華を繰り返すことで、身体の一部を供物として戦ったように、三ノ輪銀は一つしかない命を供物にして、世界を救ったのだ。まるで、過去の勇者たちのように。

せいれいシステムはスタンドアローンで動いており、勇者システムとは直接連動はしていない。せいれいは独自に判断し、勇者たちの助けとなるように行動する。また、ほとんどのものはしゃべることができないが、意思をもっている。その行動原理は勇者を絶対に死なせないこと。過激な戦いになるであろうバーテックス戦に、勇者になれなかったものたちによる、未来の勇者たちが三ノ輪銀のようなことにならないように作成したシステムである。この想いが果たして未来の勇者たちに届くのか、それは分からない。もしかしたら、その想いは

別の解釈をされるかもしれない。だが、私はそれでもいいと思う。未来は勇者たちの手にかかっているのだから。私たちのような勇者になれなかった者たちはただ見守るだけでいい。それが傍観者に与えられた責務なのだ。

第二話　日本酒とファーストキスと幽霊少女（1／3）

私は目をさますと辺りを見回した。いつもとは違う景色。私の部屋では無い。白い壁に白いベッド。外を見ると夕暮れすぎなのか、海の向こうがうっすらと紅い。私は夕飯の買い物を思い出し、立ち上がろうとすると、足に激痛が走った。私は前のめりに倒れ込もうとした瞬間、どこか優しくて柔らかい床が、私を受け止めてくれた。

「間一髪セーフだな」

私を抱きしめた、その男は、私の頭に手を乗せる。

「なんであなたがこんなところにいるの。と言うか私はどうしてこんなところにいるの」

「覚えていないのか。昨日の夜のことを。あんなに激しかったのに」

「全然覚えていないわ」

「風ちゃんはアレだね。飲むと記憶を失くすタイプだね」

「飲むと？」

私は昨日のことをよく思い出した。そう言えば、昨日は家で鍋焼きパーティーをしたのだった。私と樹、それに乃木春信先生の３人でだ。

熱々の鍋焼きを囲って食べたところまでは覚えている。

「確か昨日は鍋焼き囲って、勇者部結成に向けて、あれその後のことが思い出せない」

「やれやれ、風ちゃんは僕のお酒を水と間違えて飲んじゃったんだよ。あれには焦ったね」

「・・・」

「ほんの一口だったけど、顔真っ赤にさせて。ほとんど何言っているのか。分からないよ状態で。服を脱ぎ出そうとした時には、樹ちゃんに止めてもらったよ。でも風ちゃんは言うこと聞かずに、『私は勇者だー』って言っていきなり家を飛び出して、僕も樹ちゃんもビックリ」

いつの間にか彼の後ろに樹が立ってる。

「お姉ちゃん、大変だったんだよ。乃木先生が見つけなかったら、もっと大変なことになっていたよ」
「私、何しちゃったわけ」
「うん、橋の上から川に向かってダイブした」
「嘘、え、そんなことしたの私」
「いつもキリッとしたお姉ちゃんが駄々こねて、乃木先生もたじたじだったよ。でも、川に飛び込んだ、お姉ちゃんを乃木先生が助けてくれたから。それに乃木先生が適切な処置をしてくれなかったら、お姉ちゃんどうなってたか」
　樹の目から涙がポロポロと溢れる。どうやら、樹にすごく心配をかけてしまったようだ。
「まったく、可愛い樹ちゃんを泣かせて、悪いお姉ちゃんだね、キミは」
「何、私を悪者扱いしているのよ。元の原因はあなたがお酒を持ち込んだからでしょ」
「いや、うどんには日本酒でしょ。琴平町に住んでる友人からもらった日本酒を。まさか、風ちゃんが飲むとは思わなかったよ」
「まあ、いいわ。樹に心配かけちゃったし、どうやらあなたにも助けられたようだしね。今回は見逃してあげる」
「それは、良かったよ」
　彼が安堵する。それを見て樹が話す。
「でも、お姉ちゃん、あんまり気にしないでね。アレはノーカンだと思うよ」
　顔を赤くして樹が言う。
「樹、何言ってるの？」
「私、人工呼吸見るの初めてだったから」
「誰と誰が人工呼吸をしたの」
「・・・」
「待って、頭が混乱してきた。私は橋からダイブした、そこを助けたのが乃木先生。ということは、えー!!」
　私は混乱した。そんなわけない。私のファーストキスがこんなことで奪われるはずがない。私は恐る恐る彼の顔を見た。

「いや、あれは人命救助だよ。チューじゃないさ」
「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ」
私の声にならない声が病室に響き渡る。私のファーストキスは、お酒を飲んで酔っ払い、橋からダイブして、彼が溺れた私を助け、彼の人工呼吸によって散ったのだった。

第二話　日本酒とファーストキスと幽霊少女（2／3）

初キッスはもっと甘いものだと思っていた。よりにもよって、酔った勢いで失うのは。それも、覚えていないというのはショックである。私はどうして何も覚えていないのだろう。そうだ、樹が言うようにこれは人口呼吸、ファーストキスではない。断じて、キスなのではないのだ。

「そうだ、私はうら若き乙女。ファーストキスは白馬の王子様と決まっているのよ。そう、私はうら若き乙女なのよ」

私がブツブツ自分に暗示をかけている横で、樹と彼は顔を見合わせて、首を横に振るう。

「どうやら、風ちゃんはあっちの世界に旅立ったようだ。立派になったね」

「あのー、乃木先生。お姉ちゃんは今日も病院に泊まるのかな」

「そうだね。あと1日は検査入院だね」

「そうなると、今日も私は1人でお留守番か」

「いや、流石に樹ちゃんを1人にできないよ。今日は僕も泊まーーーー」

「あんたは何考えてるのよ。このロリコンがーー。酸素魚雷を食らわすわよ」

「いや、キミ酸素魚雷持ってないでしょ」

「ぐぬぐぬ、そんなことはどうでもいい。あんたと樹を二人っきりにはできないわ」

「はいはい、なら僕の知人に頼むよ。彼女だったら樹ちゃんには無害だから大丈夫だろう」

「あんたの知人だから心配だけど、背に腹は変えられない」

「センセイに任せておけば、樹ちゃんも大丈夫だよ」

「先生？」

「そう、とっても偉い学者でね。僕は親しみを込めて、センセイって呼

んでる」
「どうやら、あなたより信頼できそうな人のようね」
「そうそう、僕よりセンセイは信頼できるよ」
「まあいいわ。勝手に話し進めちゃってるけど、樹もそれでいいかな」
「うん。私はそれでいいよ。乃木先生の先生か。どんな人なんだろう。なんだか楽しみ」
うきうき顔の樹。どうも、鍋焼きパーティーの頃から樹の彼への態度がどうも変。いや、なんかすごく興味を持ってる感じ。確かに乃木先生はすごく面白い先生だが、限度がある。それに、ここで変な勘ぐりを入れるとまるで私がーーー、いやそれはないか。
「明るい内に家に帰りなさい。乃木先生くれぐれも、樹を襲わないでくださいね」
「樹ちゃんは、襲っちゃいたいくらい可愛いけど、僕は紳士だから襲わないよ」
「だといいけど。樹いいわね。男は皆ケダモノよ」
「おいおい、何を妹に吹き込もうとしている」
「防衛結界よ」
「さいですか。あ、それと風ちゃんの携帯端末が水浸しで使えなくなったから、代わりにこの端末を渡しておくね」
「手際がいいわね」
私は白い携帯端末を預かる。前に使っていたのは旧式の携帯で。今手元にある端末はディスプレイが大きく、操作もしやすそうである。
「それと、どうもこの病院出るみたいだから」
急に外が真っ暗になり、どこからか風の音がゴーゴーと鳴り出す。天気も曇ってきたのか。雨が降りそう。
私は唾を飲み込む。
「何が出るの？」
「少女の幽霊がだよ。夜のトイレで、すすり泣く声が」
「あんた、私が子供だからって、そんな作り話で怖がると思うの」
『トイレの紙がないよ。紙がないと。私、トイレから出られないよ』

と一番奥のトイレから聞こえてくるそうだ。そして、すすり声が聞こえる扉を開けるとーーー、あれもうこんな時間だ。樹ちゃん早く病院を出よう」
「え、そこで終わり。何この展開。トレイで泣いていたのは誰よ。オチはないの」
「その先は、生きて会えたら答えを教えてやる！」
「え、なに。私、死ぬほどヤバイの」
　ニヤリと笑う彼が樹の手を取る。
「バーイ！」
　樹もこっちに手を振る。私もそっと手を振った。いったい、幽霊の話とはなんだったのか。別に怖くないけど。
　なんだか言いえて奇妙である。
　彼から受け取った白端末の電源をいれる。なぜかデスクトップ上には怖い話１００選というアイコンがあった。私は興味本意にそのアイコンを触れてしまった。それが、恐怖の一夜の始まりとも知らずに。怖い話は西暦時代のある人物が体験した体験談が文字とときには光や音といった演出で、俗に言う動く小説といったものだった。だが、妙にリアルな語りと演出が極まって。まるで、その人物が横で語りかけてくるような臨場感がした。
　そして、私は案の定夜中にトイレに行きたくなったのである。あのトイレの話と怖い話１００選のコンボで、私の恐怖値はＭＡＸ。ゲームのコントローラが心臓音と同期したように。手に汗握る
　展開。今まさに私は選択を強いられている。
　１．朝までおトイレを我慢する。
　２．盛大におねしょをする。
　３．勇気を出してトイレに向かう。
　私が選んだのは『３』だった。
　私は勇者なのだ。幽霊などに負けない。私は松葉杖を掴みトイレの方向へと進み始めた。
　夜の病院とはなんと薄暗いことか。あまり、病院にお世話になったことが無かったので、慣れない空間だった。

トイレは渡り廊下の突き当たりを右に行ったところにある。私の部屋からはずいぶん遠いところだ。

いざトイレに入るとなんてことはない。幽霊はいるはずもなく。私は優雅に花摘みをしていた。その時、隣のトイレに誰かが入る音がした。これだけだったら、まだ誰か別の人がトイレに入ったんだと思った。だけど、次に聞こえてきた声が、その予想を外した。

『うーん。紙がないよ。紙がないとトイレから出られないよ』

私は卒倒しそうになった。だが、それに踏みとどまる。さっきまで読んでいた怖い話１００選が私に力を与えた。そして何より、神樹様の勇者は幽霊を怖がったりしない。私は意を決して、隣の個室を開ける。個室は何故か鍵がかかっていない。個室の中には幽霊ではなく、身体中包帯をぐるぐる巻きにしたミイラが、半べそかきながら、空のトイレットペーパーの芯を恨めしそうに見つめていた。

私は、幽霊ではなく、ミイラと出会ったのである。

第二話　日本酒とファーストキスと幽霊少女（3／3）

「あの～、個室のトイレを勝手に開けるのは良くないよ～」
ミイラ少女は、先ほどまでトイレットペーパーが無いことで泣きべそをかいていたのに。顔はキリッとしているつもりなのだろうが、包帯グルグル巻きなので、全く表情がつかめない。
「うん。そうだね。ゴメン」
なんとも言えない場の空気に思わず謝ってしまった。
「ところで、トイレットペーパーを分けて欲しいよ～。それでトイレを覗いた事は許してあげるよ～」
強気のミイラは私に手を出す。何だろう、この気持ち。ミイラのくせに、何故か可愛らしい。そして、いじめたくなる。私のＳスイッチが目覚めた。
「うん。トイレットペーパーはここにはなさそう。さっき私の方のトイレも切れちゃったみたい」
それを聞いたミイラ少女は固まった。
「私、このまま一生トイレから出られないのか～。友達少ない私にも、トイレの花子さんは優しくしてくれるかな～」
ミイラ少女は深く考え込む。ミイラ少女は友達が少ないらしい。なんとも悲しいつぶやき。まあ、ミイラ少女と積極的に友達になりたがる人は少ないだろう。私はどうもか弱そうな子が好きみたいだ。このミイラ少女を無性に抱きしめたくなった。
「やれやれ、仕方ないな。トイレットペーパー探してくるから、そこで待ってなさい」
「ありがと～。助かるよ～」
少女の笑みがグルグル巻きの包帯の端から見えたような気がした。
変な子と出会ってしまった。
トイレで出会った少女にトイレットペーパーを渡したあと、何事もなく少女たちの花摘みは終了した。

ミイラ少女は私の部屋とは反対側の棟であった。どうにも心配だったので、ミイラ少女を部屋まで送る事にした。
部屋に入るとそこは伽藍とした何も無い部屋、いやベッドはあるのだが、それ以外のものが何も無い。まるで彼女というハコを閉じ込めるための部屋。そうまるで聖櫃を納める神聖な場所。彼女は文字通り友達がいないのかもしれない。
「なんか寂しい部屋だね。そうだ、今度お花を持ってくるよ。どんな花がいいかな。そうだ、まだ自己紹介してなかったね。私は犬吠埼風、あなたのお名前は?」
「犬吠埼・・・、あなたが犬吠埼夫妻の・・・」
ミイラ少女はブツブツと何かをつぶやく。よく聞き取れなかった。
「・・・私の名前は乃木園子だよ～」
「乃木?もしかして乃木春信先生の妹さん?」
「春信?ああ、ハルるんのことか」
「何そのあだ名。あいつ、妹にアダ名で呼ばれているの」
「ところで、私ハルるんの妹じゃ無いよ」
「え、どういうこと?」
「確か、ハルるんの旧姓は三好だったはず～。最近、乃木家の間で誰がトップになるかの言い争いがあってね～。実質、私がこんな状態だから。大赦という組織を動かすためには、優秀な人材が必要なの～。だから、優秀な彼を乃木家に迎えたって聞いたよ～」
「へー、なんか小難しい話ね。まあ、あの人がとってもすごい人だということは分かった。そして、すごく変人よね」
「そうなの～」
「乃木さんは、知ら無いかもしれ無いけど、あいつはロリコンで変態で真性中二病で。私のことをネタにしていつも笑うのよ。今日だって、幽霊少女の話をしたからこんなことになったのよ」
「私の知ってるハルるんはいつも無表情で、何事もテキパキこなし。誰に対しても端的に物言い。いつも周りには無関心で。でも、いざとなると率先的に動く。ワッシーとミノさんに出会う前の私に似てるかな～」

「へえー、今の先生と同一人物とは思え無いな。それと、ワッシーさんとミノさんって乃木さんの友達？その名前が出た時、とっても嬉しそうな顔だったよ」
「う、うん・・・。とっても大事な友達」
　気のせいか、彼女の顔が少し暗くなる。
「でも、フゥ～にも友達たくさんいるんじゃない」
　突然、乃木さんが私の名前を呼んだ。ちょっとびっくりしたけど、なんか嬉しかった。
「今の私には、友達を作るのは難しいね。妹の世話と変態の世話をしないといけないから」
「変態？ああ、ハルるんのことね」
「そう、だから今はとっても充実している。こんなの・・・」
　そう、こんな感情はお母さんとお父さんが生きていた頃以来だ。
　今の私は、勇者集めのこと、勇者部のこと、樹のこと、そして数年後のバーテックス戦に、どう対応していくか。それしか考えていない。
「どうかした？」
　園子が私の顔を心配そうにのぞく。
「いや、なんでもない。園子も友達少なそうだし、私も友達少ない。なら私たちは似た者同士だね」
　私の言葉に、園子は瞬きする。
「似た者同士は惹かれ合う。それが運命。導きなのよ」
　私は息を吸う。最近は積極的に友達を作ろうとはしなかった。でも、彼女とは友達になりたくなった。いや、私のソウルメイトとして、彼女に共鳴しているのだ。
「だから、私の友達になってください」
　すごく恥ずかしい。友達を作るのってこんなに恥ずかしいものだっけ。なんだかソウルが熱い。
「フゥ～、それずるいよ」
　彼女の瞳から涙が溢れている。私は不覚にもドキドキした。包帯グルグル巻きの彼女が可愛く見えた。

「こちらこそ、私と友達になってください～」

この夜、ファーストキスのことや幽霊少女のことよりも、大事な思い出が出来た。

私、犬吠埼風と乃木園子は友達になったのだ。

間幕2　神樹

急に呼び出されたから何かと思ったら、犬吠埼姉妹の面倒を見て欲しいとのことだった。相変わらず、こちらの状況を考えず行動をする彼に呆れつつも。ある意味、犬吠埼姉妹の妹の方に接触できるのは、勇者システムを正確に調整する上で必要ではあった。

本当に接触せずとも調整は可能だが、彼には彼の思惑があるのだろう。彼は犬吠埼姉妹にご熱心なのだ。勇者部なるもの立ち上げにも協力している。

犬吠埼家の長女である犬吠埼風は現在病院にて検査入院とのこと、その間犬吠埼樹が家で1人になってしまうため、私が呼び出されたのだった。

最初は彼が犬吠埼樹の面倒を見る予定だったが、犬吠埼風の防衛結界により、私を呼び出したのだと彼は言う。

彼は今度、琴平町の日本酒とうどんをご馳走するということで、依頼をしてきた。私はこう返してやった。

『うどんはカレーうどんで、カレーは三好家特製で、手を打とう』

彼は二つ返事すると、私を犬吠埼家に招き入れた。舞台裏で語るだけの語り部が、ほんの少しだけ舞台に立たされる。これはそんな話なのだろうか。この出会いが彼の筋書きの一つであることは確かである。それでも、勇者になれなかった者がもう一度舞台に立てるのはすごく嬉しく思う。それが、彼の仕組んだことだとしても。

犬吠埼樹はとてもいい子で、可愛い子だった。それは、見ず知らずの私を受け入れたこと。それと、彼を信頼していること。それに、夕食がカレーだったことも犬吠埼樹への評価が上がった要因であった。隠すことでもないが私はカレーが好きなのである。カレー好きな子供に悪い子はいない。そう世界で決まったいるのだ。

また、犬吠埼樹は、少々料理下手でもあるようだ。彼からも連絡を受けてるが、犬吠埼風のように料理を作ることはあまり得意ではないという。まあ、元来小学生の彼女が料理をテキパキと作るのはあまり良い環境にいるとは思えない。子供のうちは料理は、親が作ってくれ

るものなのだ。だが、犬吠埼家の両親は亡くなっている。両親を亡くした子供がどのように育つかを私は知っている。でも、彼女たちの周りには、彼女たちが知っている以上にたくさんの人に見守られているのも知っている。

結局、犬吠埼樹と一緒にカレー作りをすることになった。カレーというのは、ニンジン、じゃがいも、玉ねぎ、お肉、それに市販のカレールーで作る。誰でも簡単に作れる料理だ。だが、その家庭ごとに、プラスされるものがある。例えば、酸味とコクを出すにはヨーグルト、コクをつけるならチョコレートといったように、味にプラスをつけることはある。また、添え物に至っては、福神漬けが鉄板だが、らっきょなどもトッピングとしてはありだ。珍しいところだと、ラムレーズンを入れるところもある。その家庭ごとの味が出るのがカレーなのだ。『その家庭を知るにはカレーライスを食べよ』と言っていた人がいる。まったく、その通りだ。

カレーの話で思い出したのだが、大赦が奉っている神樹様というものに我々はどれぐらい分かっているのだろうか。文献は大赦検閲済みのため、幾つかの重要なことは失われてしまった。それをなぜ消してしまったかは、３００年前の人たちにしかわからない。だが、初めてバーテックスが襲ってきた３００年前にこの地を救った乃木若葉という勇者とその側にいた少女の物語は、大赦の関係者なら誰でも知っている歴史である。そして、初めて神樹様に接触したのが大赦だと言う。ただ、私はこの歴史をあまり鵜呑みにしていない。現在１９回の満開と散華を繰り替えした乃木園子の先祖である、乃木若葉は本当に勇者なのかと。勇者になろうとしてなったのかと。今の勇者システムを発案した彼女と同じではなかったのかと。いや、歴史の軌跡を探るにはまだキーワードが足りなすぎる。その一つが神樹様だ。当たり前に奉っているが、あれは本当に神様なのだろうか。一説では土着神の集合体が神樹様だということになっている。では、土着神達はなぜ集合体となったのか、なぜパーテックスと戦うことになったのか。わからないことだらけである。西暦の時代にラグナロクという終末の話がある。ようはこれも、神様達の争いに人間が巻き込まれた

だけなのではないか。そもそも神様を人の定義で考えるのもおかしいことだが、私は納得いく答えを得ていない。そろそろ、カレーが出来上がるようだ。犬吠埼樹がカレー皿を取り出している。私はご飯少なめ、ルー多目をお願いした。犬吠埼樹はテキパキと皿にカレーを盛り付ける。どうやら、犬吠埼樹は盛りつけが得意なようだ。

1人じゃない夕食は久しぶりだ。カレーもなかなか上出来な出来である。犬吠埼樹も黙々と食べている。いい食べっぷりである。先ほどの話に戻るが、神樹様がこの四国の周りに壁を作り、四国を守護していることは知っている。そして、外の世界が地獄であることも。ただ、分からないのが、バーテックスが神樹様を目指すことだ。そして、勇者以外には危害を加えないことだ。

神樹様だけを破壊するのであれば、西暦の時代にあった、超長距離砲のように、遠距離から破壊してしまえばいい、なのにバーテックス達はそのようなことで、神樹様を破壊しようとはしない。神樹様に接触することが目的のように思える。

神樹様の麓には大赦の本拠地があるのだが、その地に踏み入れられるのは上層部でも一握りの人間だけで、神樹様の麓には一体何があるのかは、私にも分からない。もしかしたら失われた神器であり、勇者システムの武器形成の元となった『生太刀』が収められている可能性がある。だが、それだけで、あんなに厳重にする必要がない。

まあ、そんなレアな武器が収められていたら彼女が黙っていないだろう。勇者になりたくないと言っていた彼女だが、歴代の勇者が使用していた武器には興味を持っていた。弓、槍、斧、大剣、太刀、小手、銃、そして最後が糸。これらの武器を開発した彼女だが、オリジナルのそれこそ先ほどの『生太刀』と同等の武器はついには作成できなかった。ただし、いくら壊れても永遠に修復できる武器を開発できた。これも勇者システムの大事な機能の一つである。

勇者システムは、どんな攻撃をも防ぎ、勇者を守るためのせいれいシステム、いくら壊れても壊れることのない武器形成システム、最終切り札である満開システム、そして絶対的な力の代償を支払う散華システムがある。これら、4つのシステムがおおむね勇者システムのの

中枢システム。このシステムを使って、勇者たちはバーテックスと戦わなくてはならない。私は改めて、犬吠埼樹を見た、この小さな少女も否応なく戦いに向かうのだろう。その時の代償行為が、何になるのかは分からない。だけど、どんな代償であれ、犬吠埼樹は負けることはないだろう。だって犬吠埼樹は犬吠埼夫妻の子供たちなのだから。私はそう思いながら、カレーの味をかみしめていた。

第三話　ＳＯＳ！即売会に参加せよ（前編）

「即売会に出ようぜ」
　なんの脈絡もなく、春信先生は部室で宣言した。
　私が退院して、部室に着くと、春信先生の第一声に嫌な予感がした。その嫌な予感が的中した。
「いや、友人と同人誌作ろうって話になって。これがなかなか難しい。そこで我が部の出番だ」
「何が、我が部の出番よ。まだ、何を目的とする部かも決まって無いでしょ」
「まあまあ、風ちゃん。まずはこれを見てくれ」
　先生が私にノートよりも薄い本?を渡す。装丁には、私が今一番はまっている艦これの絵だった。ただ、絵はあまり似ていない。かろうじてそれが艦娘であることが分かる。中身を開くと、そこには数ページカラーの挿絵と文章がずらりと並んでいた。どうやら、小説というものらしい。
「これ、もしかして艦これの小説」
　私の回答に満足そうに頷く。
「そう、我が魂のソウルメイト、風よ。この同人誌は比叡を追悼したシリアス重視の小説で。琴平町に住んでる友人が、書いたものだ。比叡との甘酸っぱい恋物語。叢雲との三角関係。そして、比叡との別れ。超絶感動もの巨編さ」
「そうなの。あ、私、叢雲好きなのよね。でも、比叡って金剛型２番艦の金剛お姉さま好きの子でしょ」
「お、風ちゃん詳しいね。そうそう、その比叡ね」
「で、この小説と即売会に何の関係があるの」
「この小説の続編を今月末の、観音寺市の世界のコイン館で行われる、即売会に『Ｊａｍｉｎｇ　Ｂｏｏｋ　Ｓｔｏｒｅ　２号店　Ｗｉｔｈ　讃州中学勇者部』として出店する。これは最重要事項だ」
「何で私があんたの即売会に参加する必要があるのよ」
「それは、社会勉強だよ。風くん。いろんなアニメ、漫画、ゲームをし

ていると、たまにこんな設定だったらこの話はどうなるんだろうって思わないか。僕は思う。そうＩｆの世界。それを二次創作にして、みんなと共有する。素晴らしいことだと思わないか」
「・・・確かに、物語に自分なりの解釈を加えるのはアリかナシかと言われたら、アリよね」
「そうだよ。それこそが、ソウルブラスト。新たな力の覚醒なんだ」
「分かった。で、私は一体何をすればいいの？」
「ふむ、風ちゃんにはイラストを数枚お願いする。もちろん、艦これの好きなキャラで構わない。そうだね。叢雲描いてみたらいい」
「なら、叢雲のサンタコス描いてみようかな」
「それはいいね。是非是非お願いするよ」
「叢雲を可愛く描いちゃうからね」
「それと、もう一つお願いがあるんだが、いいか」
「何よ、改まって」
「このイベントに樹ちゃんと、園子嬢も参加して欲しいんだ」
「樹はいいとして、園子も参加させるのそれは大丈夫なの？」
　園子は包帯ぐるぐる巻きのミイラの状態。あんな状態で外をであることが可能なのだろうか。
「毒電波を浴びた太田さん状態に見えるだろうが、園子嬢も即売会に前から行きたがっていたからな。今ならまだ身体を動かせるし。コスプレで売り子をお願いしようと思う。あと、センセイも参加させるから問題無いと思うよ」
「センセイさんか、前に樹がお世話になった人だよね。一度お礼を言いたかったのよね。園子の方も、身体に差し支えなければ、参加でもいいんじゃない。私も園子とイベントに参加したいし」
「そう言ってくれると思って、樹ちゃんと園子嬢には連絡済みだよ」
「手際がいいわね。前にスマホ端末を渡してくれた時みたいね」
「その端末の調子はどう？」
「え、別に特に問題はないよ。あの怖い話のアプリもあれはあれでいいアプリだったし」
「それは良かった。それと、渡した端末のアプリの使い方は説明書が

あるから、一通り見ておいてくれ」
「了解です。ビシィッ！」
「今日はいつになく。素直だね」
「私、今無性に叢雲の絵を描きたい。私はイラスト王になる！」
「やる気があって実に良いことだ」
　こうして、私は叢雲のイラストひたすら描き続けた。最初こそお粗末な絵だったが、そこは私の女子力により、絵はメキメキに上達し、なんとか叢雲サンタコスバージョンが完成したのだ。なかなか良い出来であった。
　それをあの人に見せたら、ベタ褒めだった。どうやら、あの人もイラストを数点描いていたみたいだ。ボロボロになりながらも仲間を守る比叡の絵と、海に轟沈していく比叡の絵だった。
　どうやら、小説の方も完成したようだ。あとは、即売会を待つのみ。
　即売会まであと数日に迫っていた。
　即売会当日、現場に到着すると私は机の上の置かれている同人誌を見て、歓喜の声を上げた。
「これが、私たちの同人か。すごい、ちゃんと出来てる」
「お姉ちゃん、すごいね。こっちにＣＤもあるよ」
　樹も歓喜の声を上げる。樹の方は私のイラストとは違い、アニメソングのカバーを歌った。最初はすごく緊張していたけど、どうも春信先生のお友達が樹の緊張を解いてくれたみたいで、樹もちょっとは自信がついたかもしれない。
「フゥ～、助けてよ～」
　後ろから園子の声が聞こえた、振り返るとそこにはプラグスーツを着た包帯ぐるぐる少女が、まさに半泣き状態で立っていた。
「ぷっぷぷ、園子。その格好なに？」
「これは、ハルるんが無理矢理着せたんだよ～。なんか初代包帯少女の格好なんだって～。でも、これボディラインがぴっちりで、なんだか恥ずかしいよ～」
「すごく似合ってるよ。園子。うんうん。実に襲いたくなるくらいに」

「フゥ～、なんだか目が怖いよ。それにそのわしわしとした手の動きはなに？」
さすがに私の邪念を察知したのか、園子はジト目で私を見る。それも実に良い味を出している。売り子としてこの上ない。グッジョブ春信先生。
そんな2人のやり取りを見ている人がいた、見たことがない人だ。
私があったことないのは、春信先生の友達のセンセイさんと樹の歌の師匠ＤＡＩＧＯさんだけだ。
たぶん、センセイさんの方だと思った。
「・・・」
彼女はじっと私の目を見る。
「えっと、春信先生の友達のセンセイさんですか？」
彼女はコクリと頷く。どうにも表情が読め無い。
「そうだ。まだ、お礼を言ってませんでしたね。私が病院に入院したとき、樹の面倒見てくれてありがとうございます。樹1人だと心配だったのでとても助かりました」
私のお礼が伝わったのか。センセイさんはにっこりと微笑んだ。ああ、天使がおる。でも、すごく物静かな人だな。さっきから一言も言葉を発しない。私の怪訝そうな顔に、センセイさんは手をポンと叩き、バックからスケッチブックとサインペンを取り出した。
『実は私、声がでないんです』
センセイさんの細い指がスケッチ上にその言葉を書き込んだ。
私はその言葉に困惑していると、樹がセンセイさんに気付いたのか。てくてくと近づいてきた。
「センセイさん、お久しぶりです。お姉ちゃん。この人が前にお世話になったセンセイさんです」
樹が屈託ない笑顔で紹介する。
センセイさんもにっこり笑う。その笑顔はしゃべれないとは微塵にも思えない。
「よ、どうした風ちゃん」
私の肩をポンと春信先生が叩く。

「お、センセイも来ていたのか。今日は宜しく頼むな。樹ちゃん、あっちにＤＡＩＧＯが来ていたから手伝ってきて。センセイは机の上に同人誌をならべて。園子嬢いつまでもメソメソしない。可愛い顔が台無しだぜ。風ちゃん、ちょっと同人誌運ぶの手伝ってくれ」
　提督のコスプレをした春信先生が来た途端。サークルの空気が変わり、あっという間に同人誌が机に並ぶ。そして、即売会の開場の時間が迫ってきた。
「お姉ちゃんドキドキするね」
「フゥ～、なんだか私もドキドキしてきた」
　２人の緊張が伝わる。
「なに２人とも緊張しているの。私はワクワクしっ放しよ」
「そうだよね。今日のお姉ちゃんすごく早起きだったし、昨日も中々寝付けなさそうだったよね」
「へぇー、フゥ～は遠足を楽しみに待つ子供だね」
「うるさいわね。すごく楽しみにだったんだから仕方ないでしょ」
　私は頬を膨らませる。そんな私を見て２人は笑う。２人の緊張が解けたのが分かる。開場のアナウンスが流れた。いよいよ、即売会の開始だ。
　数時間後、私たちの同人誌は好調に売れた。そして、昼過ぎにはすべて完売した。
「お疲れ様。まさか、昼前に完売になるとは、ひとえに園子嬢のコスプレ効果が出たのかな。風ちゃんとＤＡＩＧＯは。先に休憩に入ってくれ。センセイと樹ちゃんは、撤収の準備を。僕と園子嬢は着替えてくるよ」
　そう言えば、ＤＡＩＧＯさんと話す機会がなかった。それに、樹の師匠には挨拶しないと。私はＤＡＩＧＯさんに話しかけると。ＤＡＩＧＯさんはピクッとなる。どうもこの人は春信先生ともセンセイさんとも違う感じがする。
「風君は、戦場の風を感じたことがあるか」
　やっぱり、春信先生の友達だった。どこぞのワイルドな口調。そして、口元には何故かココアシガレット。何だろう、とても残念な人な

気がする。
「ロックの風が俺を呼んでるぜ。俺の歌を聴け！」
私の周りには変な人が集まる退出なのだろうか。このままいくと、彼は何処かへと消えてしまう。私は、話を変えるべく、話題を振った。
「ところで、ＤＡＩＧＯさんと春信先生、それにセンセイさんとはどういう関係何ですか」
「その話をするためには、彼女のことを話さなければならないな。俺と春信、センセイと彼女は幼馴染でね。勇者になることを夢見て日々勉学に励んでいた。俺も元は大赦の人間でね。君のことも春信から聞いているよ。君が勇者候補で、犬吠埼夫妻の子供であること。そして、今日君にとっては、真実の世界を知ると思う。だけど、春信を責めないでくれ。あいつは、今も探しているんだ。彼女の亡霊を。そして、その亡霊に一番近い君に何かを期待している。それが何かは分からないけど。結城友奈、東郷美森では出来ないことを」
私の端末がけたたましい音を発する。端末を取り出すと、赤い文字でこう書かれていた。
『ー樹海化警報ー』
「あいつの言ってたことは本当だったか。しかも、自分では言わない気だな。なら、俺が取ることは一つ。風君、この世界を守れるのは君だけだ。世界を守ってくれ」
そう言った、ＤＡＩＧＯさんの時は止まり、世界が静止した。淡い花びらが舞い、辺りは一瞬でその姿を変える。私が知っている世界はその時壊れ。そして、勇者候補から勇者へと昇格した瞬間でもあった。
勇者候補であった、結城友奈と東郷美森はいない。私一人で、世界を救うしかない。私は犬吠埼風。勇者、犬吠埼風なのだ。

第三話　ＳＯＳ！即売会に参加せよ（後編）

周りの景色は、見たことがない風景。普通の植物とは全く違う色。ここが私の知っている世界ではない証拠。説明書に書かれていた樹海化による世界なのだろう。端末に書かれているマップには、《へび使い座》と表示されている。その表示がゆっくりと動いている。向かう方向は神樹様が住まう方向。説明書によると、バーテックスが神樹様に辿り着くとこの世界は滅びるという。だから、勇者はその前にバーテックスを倒さなくてはならない。

勇者に変身するためには、勇者アイコンを押せばいい。だけど、このアイコンを押したら、私は勇者の使命を得る。私はその使命に一人で耐えられるのだろうか。いや、耐えなくてはならない。家族を、友達を、世界を、私は守るんだ。

私は、アイコンを押した。服の形状が変わり、勇者の正装に変わる。そして、私の手には巨大な大剣が握られていた。バーテックスは私が視認できるくらいまでの距離につめてきた。

形状は、すらっとした細い身体、二本の腕はへびのように波打っている。あれに捕まられたら、かなりまずいだろう。私は大剣に力を込める。そして、一気に飛んだ。人間の跳躍力とは思えないほど、私の身体はあっと言う間にバーテックスの前まで飛んだ。近くで見ると分かる。このバーテックスという無機質な物体が異質であることを。バーテックスが私に気付いたのか、その腕を私目掛けて振り下ろす。私は、大剣でなんとか攻撃を防いだ。

「へびみたいに振り下ろしているけど、動作は遅いしこれなら」

バッテックスの攻撃をかわしながら、私の攻撃が徐々に当たり始める。

だけども、その攻撃は丸で相手にダメージを与えていないようだった。

「これ無理ゲーすぎ。どうやって、こんな奴を倒すのよ」

私の悲痛の叫びに、気づいたのか。バーテックスは二本の腕で同時に攻撃してきた。私は、一瞬のその攻撃をかわすことができなかっ

た。衝撃と共に私は、吹き飛ばされていた。激痛が私の腹部を襲う。胃の中のものが逆流し、口から吐き出された。口の中が酸っぱい感じがした。

痛みはある。でも、いまの攻撃で死ななかった。普通の人間だったら死んでいた。

私は説明書の内容を再度思い出した。バーテックスを倒すには御魂を出して壊すしかない。御魂を出すには、祝詞を唱える必要がある。だけど、この攻撃の中で、祝詞を唱えるのは難しい。私があれこれ考えていると、樹海の茂みが揺れた。そして、その奥から見慣れた2人が現れた。

「どうして、樹と園子がいるの」

茂みから現れたのは、妹の樹と友達の園子だった。

「お姉ちゃん、ここどこ、それにあれは何？」

樹は不安そうに私を見ている。

そんな私たちの再開を前に、バーテックスは第2撃目の攻撃を繰り出した。

私はとっさに、大剣で攻撃を防げき、2人を守った。

バーテックスはいまの攻撃では私を倒せないと思ったのか、今度は二つの腕から、特大の炎を私はめがけて、放とうとする。その瞬間、樹と園子はあろうことか、私を突き飛ばした。

炎は2人を直撃し、豪炎の柱が辺りを焼き尽くした。

「よくも、樹と園子を。私はおこったぞーーーー!!!バーテックス!!」

私の中で何かが切れた。

私は大剣をバーテックスに構えて、咆哮する。その一撃により、バーテックスの御魂が出てきた。

私は大剣を両手で構えると、頭上に掲げてバーテックスに突進する。そんなの私の攻撃を防ごうとするも、祝詞の効力により、バーテックスは動けない。私は全身全霊を込めて、剣を振り下ろした。

「一刀両断!!」

御魂は真っ二つに割れて、その存在は霧散し、空へと登っていく。

私は遂にやったんだ。人類の敵バーテックスを倒したんだ。でも、

その代償はあまりにも大きい。家族をまた失ってしまった。初めての親友とも呼べる友達を失ってしまった。私はこの業を背負って戦っていくしかない。
犬吠埼風の勇者としての戦いはこれからなのだ。
〈ＦＩＮ〉

「何を勝手に私たちが死んだみたいにいってるのよ」
私は後ろを振り返る。そこには、乃木園子と犬吠埼樹が立っていた。
私は歓喜のあまりにも、２人に抱きついた。
「どうして、２人とも無事なの。バーテックスの攻撃を受けて助かるなんて」
樹は私に白い端末を見せた、そこには勇者アイコンが表示されている。
「センセイさんが、私にこの端末を渡してくれたの。さっきの攻撃もこの端末が光って守ってくれたんだ」
どうやらセンセイさんも春信先生とグルのようだ。今回のバーテックス戦は何か裏がありそうだ。私はそう思った。
「・・・おかしい」

園子が怪訝そうな顔で、辺りを見回す。
「バーテックスを倒したのに樹海化が解けない～。ひょっとして、バーテックスは1体だけではないの～」
「園子、この事態が何なのか知っているの。それに園子もこの空間に入れるってことは・・・」
「そう、私も勇者なんだ。でも、ただの勇者じゃない。最強の勇者。私はあなた達の一世代前の勇者。そして、本来は1年後にあなた達の暴走を止める役割を持っていた。でも、今回の件で、突然私はその任を解かれ、あなたと接触することに急遽なった。本来は、会うことはないのに。私があなたと会うときは、あなたが暴走したときだけ。でも、運命は変わった。だから、私はこの出会いを後悔しない。おそらく、これから最悪の事態が発生するはず。いるはずのない、１３体目のバーテックスが最初にやって来た。この後、ハルるんの言っていたことが本当ならーーー」
けたたましいアラーム音が鳴り響く。最初に樹海化が発生した時の音とは別で、どこか壊れた音が響きわたる。
『緊急事態発生。緊急事態発生。超特別警報』
私は端末のマップを見た。そこには信じられない数のバーテックス達が表示されている。
おひつじ座、おうし座、ふたご座、かに座、しし座、おとめ座、てんびん座、さそり座、いて座、やぎ座、みずがめ座、うお座、１２体のバーテックスがこちらにゆっくりと近づいてくる。
「一体だけでもあんなに手強かったのに、それが１２体も・・・勝てるわけない」
「普通の勇者だったら、確かに難しいかな。でも、私は普通の勇者じゃないから。フゥ～、心配しないで。私が絶対守るから。もう二度と、フゥ達を悲しませたりしないから。だから、私いくね」
園子の身体が光り輝くと、そこには勇者の服をまとった少女が立っていた。その顔は決意にあふれている。
「行ってくるね」
園子のその言葉のあと、一瞬で跳躍して、バーテックスの元へと飛

んだ。
　そのあとのことは、凄まじかった。初めの2、3体は園子の繰り出す素早い動きで、あっという間に霧散した。次の3体は同時に園子を攻撃するが、それを軽々とかわし、槍でなぎ払った。
　残りのバーテックスは、合体して一つの巨大な要塞と化す。その時、園子の身体が光にあふれ、姿が変化した。その顔はとても凛々しく、神々しく感じた。合体したバーテックスの攻撃を、園子は受け止め、逆に切り裂いた。合体したバーテックスもろとも斬り伏せたのだ。12体のバーテックスは1人の勇者により、全て倒されてしまったのだ。
「ただいま～」
　すごい偉大なことをしでかした、本人はこんなのほほんとした少女なのにどこからこんなすごい力が出てきたのか。でも、今はそんなことはどうでもいい。園子が無事でよかった。
　私が迎えると、園子が私の胸に飛び込んできた。
「おかえり、園子」
「おかえりなさい、園子さん」
　園子が二人の言葉に涙する。
　その再開の言葉のあと、空に大きな亀裂が走る。その亀裂から新たな脅威が現れた。
「そんな。14体目のバーテックスなんて」
　先ほどとは違って、園子の顔が真っ青になる。
「もう一度、満開するしかない。じゃないと、この国は滅びる」
　14体目バーテックスは今までのやつとは違い。ひどく小柄な形をしている。それになんだか人に近い形をしていた。背中には羽根のような物が付いている。まるで、旧時代の漫画に出てくる天使のような。
　天使は、その優雅な動きとは裏腹に、直線的に攻撃を繰り出した。その攻撃を園子のせいれいが受け止めた。だが、その瞬間とんでもないことが起こった。天使はあろうことか、せいれいを掴み、口(?)の中に放り込んで、食べたのである。

その瞬間、園子の勇者服が霧散して、元の服に戻る。
「・・・そんな。そんなはずは無い。勇者の力を取られた？」
園子は戦意を喪失していた。だが、天使にとっては攻撃対象がただの止まった的になっただけ、園子に向けて無慈悲に繰り出す。私はその間を割って防御する。私にはせいれいが付いていないからかもしれないが、勇者の力は失われていない。でも、天使の攻撃が凄まじく防御をするのが精一杯。反撃の余地が無い。そして、痺れを切らせた天使が特大の攻撃を繰り出そうと力を貯め始めた。今度こそヤられると思った瞬間。それは起こった。
長い棒のような形状の物を持った短髪の少女が一瞬で、天使の攻撃をかき消したのだ。そして、天使は脅威を感じたのたのか。空の亀裂から撤退した。
謎の少女はこっちを向くと、園子の前に立つ。
「よう、お前が乃木か。うどんと蕎麦のどっちが優れているかを決めに来たぜ」
なんだか、よくわから無いことを言っている。うどんと蕎麦。何を言っているんだろうこの子は。園子は、短髪少女の言っていることをよく聞いていない。
「あー、なんか心ここに非ずか。そんなんじゃ、蕎麦が勝っちゃうよ。まあいいや、これじゃあ、勝負にもならないか。そこのアホそうな人」
なんかすごく失礼なことを言う人だな。
「ボクはシラトリ。この国の大社まで案内よろー。それから、寝床もね。夕飯はもちろん蕎麦だからね」
とっても失礼なボクっ娘の言葉のあと、樹海化警報が解かれたのか。辺り一面が真っ白になる。今日の戦いは終わったのだ。でも、あの天使の形をしたバーテックスはなんだったのか。そして、せいれいを食べられた園子は大丈夫なのだろうか。何よりも、この状況を読んでいた春信先生とセンセイさんの目的は何なのか。そして、謎のボクっ娘は何者なのか。分から無いことだらけである、でも1つ分かったことがある。私は初めての戦いに生き残ったのだ。誰一人犠牲者を出すことなく。それが、唯一の私の勝利でもあった。

間幕3　勇者

即売会の日に発生した【樹海化】は彼があらかじめ予想していた。
だから、切り札である最強の勇者を用意することもできたし、
当初の計画であった【かぐら】を【神座】に立たせることもできた。
ただ、結果としてバーテックスの進行は阻止できた。
だが、彼が期待していたことは起こらなかった。
そればかりか、イレギュラー要因の発生、
天使級バーテックスの発現、せいれいの強奪、四国以外の勇者の登場、
どれをとっても予定外なのに彼は予定とは違う結果に満足しているようだ。
報告によるとへびつかい座は犬吠埼風により、撃破されたという。
しかも、せいれいのアシストなしでの初陣。
おそらく、今回の戦いで死亡する可能性が非常に高かった。
そうならないようにするため、彼は最強の勇者を送り込んだ。
けれども、最強の勇者は天使級バーテックスの攻撃により、勇者の力を奪われてしまった。
幸い彼女の強奪されたせいれいはまだ1体のため、星座級バーテックス程度であれば、
戦闘に問題はない。次の戦闘では最強の勇者は使えないだろう。
その場合、犬吠埼風には勇者としての力を覚醒してもらわなくてはならない。
せいれいのアシストなしでへびつかい座を倒せたところを見ると彼女も潜在的な
勇者の力は高いようだ。それに【かぐら】の件もある。彼もそれを見越して最初の戦闘で
最強の勇者を出したのかもしれない。
四国以外の勇者である【シラトリ】に関しては、大赦本部預かりとなった。
神世紀３００年の間に他の国はバーテックスの侵略を受けて滅ん

だと習った。
外の世界は無の世界で、私たちがいる四国以外は侵略されて大昔に滅んだはず。
私たちは人類最後の【箱舟】に乗っているのだ。
それとも四国以外に箱舟があるとでもいうのだろうか。
彼女の話では自分は【長野の守護を担う勇者】だという。
だが、長野という国は３００年前に滅びている。
記録上にはそうあった。ただ、記録はねつ造されるものだ。それが数百年前のものならなおさらだ。
それに彼女が所持していた武器【如意金箍棒（にょいきんこぼう）】は、
大昔に四国の勇者が所有していた【生太刀（いくたち）】や【七人御先（しちにんみさき）】と同じ、神器であった。
彼女は現在の勇者システムを所持していない。
そのため、【満開・散華】や【せいれい】といった切り札を持っていない。
なのに天使級を撃退できたのには私たちにない力を隠しているように思われる。
それに、天使級と一緒に現れたということは彼女が天使級を連れてきた可能性も考えられる。
過去に一度だけ現れた天使級。その際には一人の勇者によって、撃退できた。
だが、そのときの勇者はいない。
勇者の末路は３つある。
一つは、バーテックスに負けて、死亡する。たいてい、事故死として処理されるが、
ひどい時だと棺桶の中身がない葬式になる。
だから、【三ノ輪銀】の時は身体が戻ってきて良かったと思うし、【鷲尾須美】と【乃木園子】が無事だったのも大赦にとっては幸いだっただろう。
身体のない葬式は嫌なものだ。伽藍洞の棺桶を見るのは辛い。

もう一つは、切り札【満開・散華】による身体機能の欠落。
【乃木園子】がいい例だ。複数回切り札を使っても【神体】にならずに動けている。
これにより、勇者の最大耐久力が実証された。
それでも最後は【神体】となり、大赦本部に祀られることになる。
最後は、ロスト。何らかの要因で勇者の力を失った状態。勇者になれない者。
勇者の使命を守ることもできず。バーテックスと戦う力を失った者。
【勇欠（ブレイブロスト）】となる。
勇者の末路は死亡、神体、勇欠のどれかになる。例外はない。
だから、彼女たちが精一杯この世界を楽しみ、悔いが残らないように生きるよう
サポートする。それが、私たち大人の使命なのである。
身勝手だが、彼女たちの笑顔が消えないことを願いたい。
そして、願わくば、彼の【春信の願い】が叶うことを願う。
私はセンセイと呼ばれる者。私を本当の名で呼ぶものはもういない。もういないのだ。